

平成24年度 子育て親育て研修大会

日時 平成24年10月6日
場所 山口県教育会館5階

テーマ

～見つめ直そう家庭教育～

講師

～坂井 芳浩氏～

児童養護施設 清光園に長年勤務し、平成22年4月より山口市議会議員として就任
山口県よりスクールソーシャルワーカー(SSW)として委嘱
山口市立川西中学校PTA副会長としてPTA活動に参加の他、子ども達にスポ少にてサッカーの指導を行う
自称「教育福祉実践家」として現場重視で活動している

※ SSW(スクールソーシャルワーカー)とは

学校では、子どもが抱える問題が複雑・多様化し、不登校の増加や少年非行の低年齢化といった現象が起こっている。こうした背景には家庭の要因が影響しており、虐待や育児放棄(ネグレクト)、家庭的な困窮など深刻な問題を抱える保護者や子どもたちが存在する。

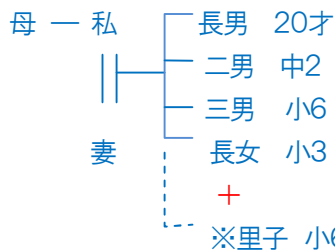
そういった中、子どもたちが置かれている様々な環境に着目して働きかけることができる人材や、学校内あるいは学校の枠を超えて、関係機関等との連携をより一層強化し、課題に取り組むためにコーディネーター的な存在が、教育現場において求められており、その担い手として、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入することができる(ソーシャルワーク)専門性を基盤にした活動を行っている。

1 活動

教育や福祉行政を中心とした市政の様々な課題に取り組む。

また、自称「教育福祉実践家」かつ「現場重視」とのことで、山口県教育委員会より委託を受け、SSWとして「不登校児童(生徒)の未然防止に向けた専門家派遣事業」で、学校やそれら児童たちの家庭に訪問し、それらの家庭や子どもたちの支援など、積極的な活動の他、現在も専門里親としてご自身の家庭に子ども達を迎え入れ、子ども達の社会的な自立に向けて献身的に尽力されている。

2 家族構成



※ 母子家庭家族より預かり、現在2年が経過(当初はパワレス(無気力)状態)
また、里子=他人との生活に、当初、家族も私自身も違和感を感じることもあったが、現在は普通に暮らしている

※ 一人目は現在20歳独立して結婚し父親となっている
また今でも今でも父の日・母の日には遊びに来てくれる

3 南三陸町でのボランティアについて

東日本大震災の仮設住宅での孤独死などを知り、昨年、社会福祉士として被災した世帯(主に高齢者独居世帯)の現況(心身の健康)調査のため、単身で現地入りし1週間活動する。

その中には、様々な仮設住宅の集合体があるが、ただ馴染みのない者同士を一つの集合体にした仮設住宅では、周りとの交流もなく、不幸な結果になっていることもあった。

逆に、(元々あった)コミュニティー等を基本とした仮設住宅では交流も盛んで活気づいていてた。

昨年の世相を表す漢字にもなった「絆」という字は、平安中期に馬をつなぐ綱から由来した言葉ですが、「糸」に「半分」と書き、「引く力、引かれる力」、それぞれが「相手のちから加減を考える」。そんな相手を「思いやる気持ちが大切」とであると、この様なときだからこそ、個々のちからの結集の「家族」と「コミュニティー(地域)」の尊さ、大事さを改めて認識。



【坂井先生～南三陸町でのボランティアについて】

4 子ども達の現状

(1) 不登校の子ども達

不登校児童(生徒)のいる家庭には何らかの問題があるケースが多く、大凡は学校からの要請が教育委員会を経由し、そこからの要請で問題家庭に出向する。

その際、虐待などの事実の確認や、その保護者に監護させることが著しく児童の福祉を害する場合(生命の危機)などにおいては、児童養護施設等にその子どもたちを保護することができるが、保護者の了解が得られないときは、家庭裁判所の決定によって強制的に親子を隔離することもある。

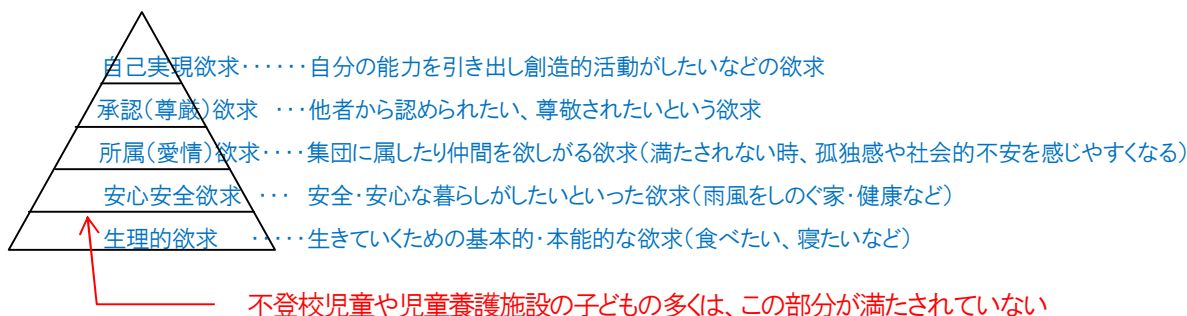
これらの子ども達には、共通して何らかの影があり、精神的な発達に歪みがある子が多い。

また、「信用しては、裏切られる」といったことを何度も経験していることから、大人を信じないといった自己防衛的な言動(怒られないように甘えてくる等)がみられる。

なお、山口県内では年間約500件の虐待に関する報告がある。

(2) マズローの欲求階層

人間の欲求は5段階のピラミッドのように構成されていて、**低階層の欲求が満たされると、より高次の階層の欲求を欲する**というもの。



(3) 母子生活支援施設の子供達との違い

母子生活支援施設は、配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、保護および自立の促進のためにその生活を支援する施設であるが、最近では、ドメスティック・バイオレンス(DV)被害者保護の一時保護施設としての利用が多く、それらの自立支援を進めるための重要な施設となっています。

この施設にいる子ども達と、児童養護施設の子供達との決定的な違いは

- ・児童養護施設 → 両親と離れ離れ → 帰りたくても帰れない ⇒ 消極的
- ・母子支援生活施設 → 母親は必ずいる → 甘えられる存在がある(=安心) ⇒ 積極的

というように、上記のような傾向が見られる他、母子支援施設の子供もは、(母親がいる)安心感からか他方に比べると我慢強いことから母親の存在の大きさに実感させられる。

5 子どもたちと接するにあたって実践してほしいこと(家庭でできること)

児童養護施設職員・SSWとしての活動を通じてみて、不安を抱える子には、安心安全の他にも、親から「自分に關心を持ってもらえているか」、「認めてもらっているか」等の悩みを持っている子が多くいる。

その子ども達にとって、親(家庭)として実践できる(して欲しい)ことは

① 客観的に家族関係を見直してみる

② 子どもたちに、自分がいかに大事にされているか気づかせる

物配りではなく、気配りが大事

弱みを見つけるのではなく、その子が頑張っているのを見つけてやる

③ 抱え込ませない

(悩みを)言える関係の人間を作る。家族ではなく客観的に立場の第三者(親戚など)がいることが大事。

④ お節介もいる

家庭が抱える問題をはぎ取ってくれる人(お節介な人)の存在も必要

※ お節介の語源・・・すり鉢の中の溝に溜まったものをはぎ取る道具

⑤ 子どもの力を信じる

自身の家庭において、三男がスポ少とは別に通っていたサッカーのクラブチームで、そのレベルの高さ等に悩み、パワレス状態となり、大好きなサッカーができなくなっていたということに気付かず、自分は里子(三男と同級生)や他の子ども達にスポ少においてサッカーを指導していた。

結果としては、三男は自分の力のみで這い上がってきてくれたことから、子ども達は親が思っているよりも強いところもある。

7 おわりに

「自身の家庭での問題に気付かず、三男のあげていた悲鳴に気付けなかった自分が里親などとして良いのだろうか?と悩んだ時期もありましたが、息子が自身で這い上がってきてくれたことは、ただただ救いでした。」

「息子には感謝しています。」

と涙ながらに語られ締めくくられました。

～家庭教育委員会～